

細工師見習いセブン

香月美夜

細工師見習いゼグ

シュツシュツとツイーニの擦れる音が等間隔で途切れることなく響いている。親方に依頼を任されるくらいに兄弟子のアストは手先が器用でツイーニの椅子を作るのが上手い。オレとたった三歳しか変わらないとは思えないくらいだ。

今アストが作っているツイーニという木を編んで作る椅子は、濡れてもすぐに乾くので水場で使われることが多い。ウチの工房で作る椅子のほとんどは飲食店の厨房で使われるが、別の工房で作った物は富豪やお貴族様が湯浴みの時に使うこともあるらしい。

「ゼグ、こつちばかり見てないで、お前はまず籠を作れるようになれ」

ツイーニの音が止まると同時に、アストからそんな声をかけられた。オレはハツとして自分の手元に視線を落とした。オレの手元には誰が作ったのかわからない手提げの籠と、同じ物を作るために準備したバニヒツがある。

一度休憩するのか、アストが革の手袋を脱いだ。汗を拭い、革袋の水を飲みながら近くへやってきて、まだほとんど作れてないオレの手元をちらりと見る。その後、親方から「手本にしろ」と渡されていた手提げ籠を手にとって、しげしげと眺め始めた。

アストが見ているのは、おばちゃん達の冬の手仕事とは思えないくらいに凝った細工の籠だ。冬の手仕事では数をこなす方が大事なので、普通の素人は細工職人見習いの手本になるくらいに手がかかる

模様を編み込んだ籠なんて作らない。しかも、これはこの辺りの細工師にとっても珍しい模様の編み方で、誰が作ったのか不思議がられている。

「これさ、アストはどう思う？ 親方は素人の仕事って言ったけど、こんな飾りを作るなんてオレには素人とは思えねえよ」

もっと正直に言おうと、細工師見習いのオレよりずっと凝った手提げ籠を作る奴を素人だと思いたくない。けれど、オレの質問にアストは「親方の言う通り、完全に素人の仕事だ」と言い切った。

「飾りの作り方は手慣れてるけど、編み目が緩い。それに、ずっと同じ張力で編まれてない。これを作った奴は力が弱いんじゃないかねえか？ 明らかに素人だ。でも、素人がここまで作るんだから、これを越えるくらいのも物が作れなきゃ次の契約が危ねえぞ、ゼグ」

見習いの契約は三年間だ。その間に親方から認められないと契約の更新はできないし、他の工房へ移っても重宝はされない。あと一年後に契約更新を控えているオレは、アストに脅された気分だ。バニヒツに手を伸ばす。富豪の奥様にも売れたという模様入りの手提げ籠を作って親方に認めてもらわなければならぬのだ。

「なあ、ゼグ。さつき親方のところに客が来てただろ？ 誰だったかわかるか？」

アストに尋ねられて、オレは「知らねえ」と首を横に振った。オレはまだあまり客の前には出してもられない。今回も客が入ってくるなり奥へ行くように言われた。よく見知った客なら対応を任せられることもあるが、新規や上客の前には出せないと言われている。

「見慣れない客で、ビシツとした格好の金持ちのおっさんとオレ達と大して変わらないようなボロ服の子供二人って変な組み合わせだった」

「……ふーん、確かに変わった客だな。親方はその客と出かけたのか？」

オレが頷いて親方が糸問屋へ行ったことを伝えると、アストが腕を組んで少し考えるように俯き、
「新しい品物の注文か」と呟いた。

「なんで新しい品物の注文を受けたなんてわかるんだ？」

「普段からよく注文される物ならわざわざ親方が出かける必要なんかない。見習いが使い走りに出されるからさ。これからの主力商品になるような新しい仕事ならいいけどな……ん？ 親方が戻ってきたぞ。こつちも作業に戻るか。ゼグもしっかりしろよ」

窓の外を見たアストが体をグツと伸ばして手をブラブラと振った後、ギュツと革の手袋をはめて真剣な顔でツイーニを手取る。オレもバニヒツを握って籠を編み始めた。

……オレだって使い走りじゃなくて、アストみたいに仕事を任されるようになるんだ。

「親方、籠ができたんで確認を……」

素人とは違うところを見せてやるぜ、と張り切って手提げ籠を編んだオレは、完成品を親方へ見せに行った。アストが「素人だ」と指摘していた張力や飾りの入れ方に気を付けたのだ。これでオレも認めもらえるか、とわくわくしながら親方を見ていると、親方はオレの籠を受け取りながら、口を開いた。

「ゼグ、糸問屋へ行って注文してあった糸を取ってきてくれ」

……評価じゃなくて使い走りかよ！

仕事の評価より先にお使いを頼まれたことにガツクリしながら、オレは糸問屋へ走った。糸問屋は職人通りの並びにあるので近いし、細工物に糸を使うことはよくあるので、店主は顔見知りだ。店中に糸

が詰め込まれているような糸問屋へ駆け込んだ。

「おっちゃん、親方が注文していた糸を取りに来ただけど……」

「ゼグか。……お前、もうちよっと口調や態度を直した方が良いぞ。そんなんじや工房で客への応対にも出してもらえねえんじやねえか？ 次の契約は大丈夫なのか？」

糸問屋の店主が糸の束を差し出しながら呆れたような顔でオレを見た。それほど、オレの口調や態度は良くないらしい。

「……契約更新は一年後だけどさ」

アストと自分の差を思い知り、籠を必死に作ってみても評価を受けるより先にお使いへ出されるのが今のオレだ。自分の状況を考えてオレが肩を落とすと、糸問屋の店主が慰めるようにバンバンと肩を叩いた。

「このまま契約を更新したきや工房に必要だと思われるような技術が必要だ。あと一年、気合い入れろよ。今は好機だからな」

「へ？ 好機？」

「何だ、知らねえのか？ この糸、シュピンネって魔獣が吐き出す糸でめちやくちや高価なんだ。それを惜しげもなく使えるような仕事が来てるんだよ。ギルベルタ商会からな」

糸問屋の店主がニヤツと笑う。

「お前達が頑張ってくれたらウチもいい儲けになる」

「ギルベルタ商会？」

「知らねえか？ 街の北にある大店だ。服飾を扱う店だからウチとも取引はある。でも、店主の右腕が

出てくるような商売はあんまりしたことがねえ。これを機会にもっとお近づきになりたいもんだ」

糸問屋の店主はギルベルタ商会がいかに大きな店であるのか、親方が今回引き受けた仕事がいかに大事なものであるのか、力説し始めた。

「……ギルベルタ商会がすげえのはわかったけどさ。オレには関係ねえよ。そんな大事な仕事がオレに回ってくるわけねえじゃん」

無理、無理とオレが手を振ると、糸問屋の店主は拳でオレの頭をゴンと小突いた。

「そんなんだから、お前は駄目なんだよ！ 親方だって初めて作る道具だ。目を離さずに仕事を盗み見て、同じ物を作るようになったとけ。上手くいけば、また同じ依頼がギルベルタ商会からやってくる。その時にできるかできないかかってのは大きいぞ。一つくらいはアストに勝てる部分を作れ！」

「お、おう……」

オレは小突かれた頭を押さえながら工房へ戻って、親方にシュピンネの糸を手渡した。そして、糸問屋の店主に言われた通りに言ってみる。

「親方、オレ、籠を作り終わったら、新しい仕事してみたいですか？ アレを何とかするんすよね？」
切られた竹が無造作に積み上げられている一角を指差す。ギルベルタ商会の客が持ち込んだ物だ。まだ仕事途中だった親方はオレの言葉にちよつとだけ驚いたように目を瞬き、すぐにいつもの不愛想な顔に戻って頷いた。

「じゃあ、この長さで竹ひごを作れ」

そう言った親方に手渡されたのは、細く削られた一本の竹の棒だった。切り口は斜めだし、側面は波

打うつていてガタガタだ。基準きじゆんにする長さながも太さふともわからない。

「……親方おやかた、この長さながって言いわれても、斜めななのうちのどこに合あわせりやいいんすか？」

「どこでもいい。だが、お前まえが一度決いめたら、その長さながにはきっちり合あわせろ」

「了解りようかいつす！ 竹たけひごの太さふとはどこに合あわせるんすか？ どこもかしこもガタガタつすけど、こつちも

オレが適当てきとうに決きめて……」

オレが竹たけの棒ぼうをあちらこちらから見回みまわしながら尋ねると、親方おやかたは少し考かんえるように目めを閉とじて、首くびを横よこに振ふった。

「いや。太さふとはこの棒ぼうを丁寧ていねいに削けずって、一番決いちばんえぐれているところに合あわせてくれ」

オレは細工道具さいくどうぐを取とつてくると、親方おやかたに言いわれた通りとおに斜めななになっている切り口きくちを真まっ直すぐに切り直なおして長さながを確定かくていさせる。それからガタガタの側面そくめんを削けずり始はじめた。

「それにしても下手へたくそだな。誰だれが作つくったのか知しらねえけどホント不器用ぶきよう。まるで初めはじめて刃物はものを持もった子供こどもが作つくった切り口きくちみたいすね」

いくら素人しろうとの仕事しごとにしてもひどすぎる。あの籠かごを作つくった素人しろうととは比べものにならない。オレの眩つばやきを拾ひろった親方おやかたは作業さぎようを続つづけながらフンと鼻はなを鳴ならした。

「洗礼前せんれいまえの素人しろうとの子供こどもが作つくった物ものならそんなものだろう。見習みならい仕事しごとを始はじめたばかりのお前まえも大たいして変かわらんかったぞ」

親方おやかたのあまりにもひどい言いい分ぶんにオレは口くちをへの字じにしなから、斜めななでガタガタになっなっている側面そくめんを丁寧ていねいに、丁寧ていねいに、それこそ素人しろうとではできないくらいに丁寧ていねいに削けずっていく。斜めななにならないように、真まっ直すぐ、太さふとも長さながも揃そろうように。

「……親方、これでどうつすか？」

その後の基準になる一本の竹ひごを作るだけで汗ぐっしりになった。親方が目を細めてじつくりとそれを検分する。きちんと仕事ができているのかどうか調べる厳しい目に、思わず喉がゴクリと鳴った。

「いいだろう。これと同じ長さ、同じ太さになるように丁寧な作れ」

オレが基準の竹ひごを作る間に一仕事を終えていたらしい親方は、オレに指示を出しながら背中まである灰色の髪を一度縛り直す。それから、オレの隣で持ち込まれたらしい竹から竹ひごを作り始めた。静かな表情で竹を次々と削っていく親方の手は全く迷いがなくて正確だ。一本作るのに時間がかかってるオレとは全く違う。

……くそっ、オレだって！

「焦るな、ゼグ。感情の揺れが刃に伝わる」

表情も手つきも変えない親方から静かな声で注意された。オレは咄嗟に親方を見た。作業中の親方の目は普段と違って怖いくらいにギラギラして真剣なのに、その刃を動かす手つきは滑らかで、シュツシュツと静かに同じ律動が繰り返される。

何か言いたかったのに言葉が出てこなかった。胸の中にあつたアストへの対抗心や次の契約に対するもやもやとした不安などの感情の揺れが刃の動く音と一緒に削り取られていくよう言葉にならない。シュツシュツと規則正しく響く小さな音と共にしばらく親方の手の動きを見ていた。

「ゼグ、静かに手を動かせ」

感情の揺れを感じさせない親方の声に何だか気持ちが妙に落ち着いてきて、オレはまた竹に刃を当て

て削り始める。親方よりゆっくりでも丁寧に、他の人から見ても細工職人の仕事だとわかるように、静かに刃を動かしていく。

最初はあまり揃っていないなかった刃の動きがシューツシューツと一定の間隔で律動を刻み始めて、少しずつ親方の動きと合ってくる。

「……親方。これ、何になるんすか？」

「さあな。竹ひごを並べて強靱な糸で編んだ簀が欲しいと言っていたが、何に使うのかは知らん」

親方が少し目を細めて竹ひごの太さを確認しながら呟く。オレが削った竹ひごも合格だったようで、親方が作った竹ひごの隣に置かれた。見分けがつかないくらいに丁寧に削られた竹ひごが少し誇らしかった。

「オレ、簀の作り方を知らなかつた。これを作れるようになったら胸を張って細工師見習いを名乗れる気がしたんで……えーと……」

オレの言葉に親方は何度か目を瞬いた後、少しだけ口元を綻ばせた。

「いいだろう。覚えてみる。シュピンネの糸を扱うのはそう簡単じゃないが……。あの籠も予想以上にいい出来だった。ゼグは細工師見習いを名乗ってもいいぞ」

おわり